ショート・ショートまとめ　1

ショート・ショートまとめ　1

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19315596

モ腐サイコ100, 霊幻総受け, エク霊, もぶおじさん×霊幻, 律霊, ヨシ霊

Twitterで書いていた短いお話のまとめです。律霊の「ちのか」、ヨシ霊の「色々あるんです」、ヨシ霊の「みだれた金糸」（金糸の煙草番外編）を収録しています。暴力描写を含みます。倫理が少しアレ。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

ショート・ショートまとめ　1

ちのか

「がっ！！」
結束バンドで拘束され、ひざまずかされた霊幻の横で、中年男が顔面を殴り飛ばされていた。
「がっ、ぐぁっ、がはぁっ！！」
超能力で抵抗を完全に封じられている中年男は、全身黒づくめの美青年の氷のような目を怯えたように見ながら、執拗に暴力を振るわれていた。
「ぐぅっ！！」
美青年──律が拳や靴を振るうたびに、ビチャビチャと返り血が霊幻にまで飛ぶ。
その血の匂いに、うっとりと霊幻は顔を歪めた。
「──こういう霊幻さんを指名したマッサージの出張除霊は、絶対に一人で行かないでください、って言いましたよね？」
殺気立った目が霊幻を捉えて、それだけでゾクゾクと彼は震えてしまう。
「ごめん」
わざとなんだ。うっとりと霊幻は律を見上げる。
「よっぽどお仕置きされたいみたいですね」
イライラする律の口から舌打ちが落ちる。
「そんな」
──して。シて、欲しい。霊幻はどうしようもなく顔をゆるめてしまう。
その顔を見て、はぁ、と律は肩を落として中年男の襟から手を離した。
誰かに犯されかけた霊幻にどうしようもなく興奮するのも。
自分に乱暴しようとした男の血の匂いが堪らなく好きなのも。
『お仕置き』をする時は、凄く盛り上がってしまうのも。

趣味が悪いのはお互い様なので。

律は観念して、他人の血の味がするキスを堪能するのだった。

色々あるんです
※別軸のヨシ霊です

「――じゃ、そろそろスっか」
煙草を吸い終えた霊幻がぎし、とベッドから立ち上がる。
「ん……」
ヨシフはその姿をどこか嫉妬まじりに見つめる。
ハンガーに向かってピンクのネクタイを外し、しゅるりとグレースーツの上着を肩から滑り落ちさせる男はこの上なく扇情的だと言うのに。
自分は何人目なんだろうか。

これは遊びなんだろうな。

今夜俺は寂しがりのこの男の一夜の寝床に選ばれただけ。そう思うたび、ヨシフの胃の腑に苦いものが落ちていく。
自分は霊幻新隆を好いている。だがそれが霊幻新隆本人になんの関係があるだろう。それを口にすれば、遊び相手として重たい、と嫌がられるかもしれない。
――いいじゃないか、一夜の遊びでも。
スラックスに手をかけて白い足を晒す霊幻にヨシフの喉が鳴る。
哀しいかな、自分の初心な恋心より、オスとしての本能が勝った。
ぷち、ぷち、とシャツのボタンを外す音が響く。
しゅる、とカッターシャツが滑り落ちて丸い肩を晒すのを、興奮に動けないままヨシフは見ていた。
「――なあ」
頬を染めた霊幻が振り返ってヨシフに歩み寄る。

ベッドに座ったままのヨシフにぎゅ、と柔らかく抱きついて。

「俺、こういうの初めてだから……優しくしてくれよな」

かた、と震える身体を抱きしめて欲しいとヨシフにねだった。

「……っはあああああああああああ⁉」

ヨシフは鍛えられた腹筋をフルに使って叫んだ。たぶんラブホ中に響いた。

「好きな奴との！初めてが！こんな安ラブホで！ヤニの臭いの中でとか！！ふざけんなよお前！！」

がっ、とヨシフは霊幻の肩を掴む。
「てめぇは俺が好きなんだな⁉」
「う、うん」
「そうか俺もお前が好きだ‼だから初夜はこんなのは嫌だ、
ぜっっっってえ嫌だ！！」

安ラブホでコンビニメシを食べて爛れた感じでベッドイン。ヨシフが考えつく中で最低の初夜だった。
「俺はてっきりお前がこういうの慣れてると思って……あーもう今日はこれからバーでも行こう。仕切り直しだ、仕切り直し」
「えっ、えっ」
ぶつぶつとヨシフがタバコに火をつけながら強引に話を進める。
「六本木のリーガロイヤルでメシ食って、そのままそこで……いや銀座のペニンシュラも捨て難いな……」
「おーい、とりあえずヤっちまわね？」
「馬鹿野郎！」
またがっとヨシフに両肩を掴まれる下着姿の霊幻。
「処女ってのはな……処女ってのは、そんなに雑に扱っていいものじゃねぇんだよ！！……任せてとけ、諜報の情報網でお前に最高のディナーとホテルを用意してやるから」

「お、おお……楽しみにしてるわ」

ところが。
中々予約が取れなかったり、ヨシフの仕事の関係でキャンセルになったり、半年経った今でも結局２人はベッドインできていないのであった……。

「だからとりあえずヤっとこって言っただろが！！」

またキャンセルを伝えてきた電話口に、霊幻の怒声が響いた。

☆残念！初夜失敗‼☆

みだれた金糸
※金糸の煙草番外編です

「俺は今、言い訳を聞きてぇんだが」
霊幻のアパートでヨシフはカチ、とタバコに火を付ける。
その音にびく、と霊幻が身をすくめる。その動きで左手の指輪がチカっと安い蛍光灯を反射した。
「俺だって寝耳に水の話だったんだぜ？お前と憑依体エクボがキス

してた、って報告書を読まされた方の気持ちも考えてくれよ」
仕事の隙間を縫ってヨシフはすっ飛んできた。自分の配偶者の不貞を確かめるために。
「……キスしてない」
冷や汗をびっしりかきながらようやく霊幻が口を開く。
「角度的に、そう見えただけだろ。俺はその……転んだエクボを受け止めただけだ」
「スパイ舐めんなよ、センセイ」
ヨシフは懐から数枚の写真を取り出してローテーブルに広げる。
そこにはバッチリエクボに唇を塞がれている霊幻が写っていた。
「俺が証拠も無しに話するわけないだろ、往生際が悪いぜ、センセイ。俺はさいしょっから言い訳を聞きに来てんだよ、その左手の指輪の意味の確認も込めてな」
写真を見てむぐんとなっている霊幻の左手の指輪を、ヨシフがコツコツと爪で叩く。
霊幻が暗い顔をして。
「──お前が返せ、って言うなら……」
する、と指輪を外した霊幻にヨシフはギョッとする。そうじゃない。手放すつもりなんかこれっぽっちもない。今回は『言い訳』を聞きに来たのだ。
「はぁ⁉なんでそうなる‼」
ヨシフは慌てて指輪を霊幻の指に嵌め直す。
「……もう俺なんて穢らわしくて嫌なんだろ」
「そんっなこと一言も言ってないだろが‼何があったのか聞かせろって言ってんだよ‼」
ヨシフは面食らう。霊幻の弱さを初めて見た。自己犠牲の塊みたいな所のある霊幻は、自己肯定感が地を這っている男でもあったのだ。
付き合っている時にはそう言うところはヨシフには見せていなかった。結婚してから、ようやく見せた一面だった。
ヨシフは俯く霊幻を抱きしめる。
「……妬いてんだよ。言わせんなよ」
「……お前が知らなかったらお前に言ったりするようなことじゃ無

かったのに」
「仕方ねぇだろ、知っちまったんだから」
「知らない方が良かったコトって俺、あると思うんだよなぁ」
はぁ、と観念するように霊幻はため息をついた。
「ソファーに突然押し倒されて……倒れないように身体を支えようとしたら、キスされたんだよ」
「……お前から誘ったんじゃないんだよな？」
「当たり前だろ⁉」
「なら、それで良い」
抱きしめて金糸に鼻を埋めて、ヨシフは長いため息をつく。
──奪われたのかと、思ったのだ。
「不安にさせたな、ごめんな」
「いや……」
遠距離での結婚を選んだのは自分たちだ。これだけで揺らいでどうする、とヨシフは自分を戒める。
でも、ソレを目の当たりにしてしまったら、居ても立ってもいられなかった。自分もまだまだ鍛錬が足りない、とヨシフはひとりごちる。
「──新隆」
「ん……」
あごを指で上向かせて唇を合わせる。柔らかい舌を絡め合わせて、わざとヨシフが唾液を流し込むと、きゅ、と霊幻はヨシフの上着を思わず握りながらそれをこくんと飲み干した。
……ヨシフのキスの癖で、霊幻もすっかりそれに慣れさせられていた。
「──すまん、もう行かなくちゃいけなくて」
「いいよ。……逢えて嬉しかった」
今回はイレギュラーな逢瀬だ。無理を通して来てしまったので、ヨシフはもう立ち上がってアパートを出ないといけなかった。
「なるべく早く連絡する」
「ん」

アパートから出てすぐ。

緑色の燐光がぐぁっとヨシフに近寄ってくる。
「識別コードＡ－４エクボ、何の用だ」
タバコをくゆらせながら、ヨシフが燐光に向かって呟く。
「別れたか？」
「おあいにく様、俺たち熱々なものでな」
「良く言うぜ、寂しい思いばっかりさせてるくせによ。今回のキスだって、アイツの抵抗は弱々しかったぜ？人肌に流されかかってた」
「大変だな、人妻に横恋慕してるやつは。お前に戸籍があれば慰謝料請求できるんだぞ分かってんのか？」
「へえ、慰謝料払えば霊幻にいくらでも口付けていいんだな？」
びきり、とヨシフのこめかみに青スジが浮かぶ。
「そんなわけないだろう二度とすんなよ除霊すんぞテメェ」
「さあなあ、アイツ隙だらけだからなぁ……キスしたらきゅってこっちの上着を握って来て、こくんってツバ呑み込むの、可愛いよなぁ？」
怒りすぎてヨシフは一周まわって満面の笑みになった。
「よーし除霊してやる。今から上に許可取ってやるから待ってろ」
「はんっ、嫉妬は見苦しいぜ！」
しゅるるとエクボは闇夜に消えていく。
「……この程度で揺らぐと思うなよ」
競争率の高い相手を娶った自覚はしっかりとヨシフにはあった。
闇夜に向かって中指を一瞬立てて、そして彼はすぐ仕事に戻った。

※※※※※

「ん？う、おっ⁉何す……っ」
霊幻の唇が情熱的に塞がれる。
「ン……っ」
どん、と霊幻はエクボの仮初の身体の胸を拳で叩いた。
「霊幻、好きだ」
「……！」

真剣に、改めて言われると心臓が止まるような心地がする。
「俺には、もう夫が……」
「本当に嫌なら突き飛ばしてくれ」
そう言われて、唇を受け入れてしまった霊幻がいた。
「ん……ふ……」
霊幻は元からエクボが憎かったわけではない。むしろ好感度は高かった。
順番が、違っていれば。
考えてはいけないもしもを考えてしまう。
「ん……」
唾液をいつもの癖で呑み込んで、エクボに縋ってしまう……手を、ぐいっとエクボを遠ざける動きに変えた。
「も……だめだ」
「……続きはしねぇのか？」
今度こそエクボは突き飛ばされる。
「さっきのは、何かの間違いだから」
霊幻はきっぱりとエクボに言う。
敢えて言えば、そう。
「ヨシフと同じタバコ吸ってから来るなんて、ずるい」
悪霊はにやにやと、それらしく笑った。